

第38回 Kozoom28 テーマ「山の日」に思う

清水健二

前回の7月は「海の日」として、明治時代から続いていた「海の記念日」を継承して国民の祝日となり、四面海に囲まれた日本は海の恩恵を受けてきた事に感謝する日だった。今月8月は「山の日」が祝日になり、こちらは2020年に新しく制定されたが、日本列島の約70%が森林面積で、我々日本人にとって昔から山は海と変わらず、生活に及ぼす恩恵に感謝する事を改めて認識する日になった。

私が山と付き合いようになったのは、大戦で大阪市内から疎開した昭和19年の冬、現在の富田林市喜志の国民学校で、耐寒訓練が実施され、上級生共々男子生徒約100名が、雪の金剛山に登ったのが山を意識した最初だったと思う。朝早く2食分の握り飯を持ち出発し、大和川の上流、石川を遡り千早・赤坂村から標高1125mの雪の金剛山に、寒さに震えながら登ったことが鮮明に思い出される。親父から借りた地下足袋はだぶだぶで、荒縄を巻いて、アイゼン代わりの滑り止めをし、手ぬぐいで頬被りし、軍手をつけ、防寒具など何一つ無い時代だから、今では考えられない貧相な装備の雪山登山だった。

しかしその時に目にした雪景色の美しさは脳裏に残り、本格的に雪山に登り出したのは約50年後退職してからだった。還暦を過ぎ退職前後は気持ちに余裕も出て、会社の仲間たちと山登りを楽しんだ。また趣味の写真で気のあった者達と山岳写真の撮影にもよくでかけた。命がけで高山に挑む登山家とはほど遠いトレッキングやハイキング気分だが、それでも四季の山々に魅了されてよく歩いたものである。幸い健脚の方だったので、春の伊吹山、夏の富士山、秋の大台ヶ原や富山の立山、冬の鈴鹿山系など印象に残る山々に出会っ



大和川から眺望する金剛山



雪の金剛山頂



雪の金剛山 (ブナ林)



金剛山 転法輪寺前の不動明王像



巨大な千年杉（夫婦杉）

てきた。中でも住まいから1時間強で登山口に着ける金剛山へ、季節を問わず数えきれない回数の登山を楽しんできた。特に雪の金剛山は美しい樹氷や霧氷の素晴らしさに魅了された。今回は雪の金剛山に絞って写真をご覧願うことにしようと思う。

千早・赤坂村の登山口の標高はほぼ600mで、山頂迄500mほど登るが、距離は約2.5kmである。登山路はよく整備されているが、結構厳しい登り坂では息を切らす。頂上近くにある転法輪寺境内で、登頂記念のハンコをもらえる。個人別登頂記録の看板が明示されていて、記録回数が2018年9月現在、1万回登頂者が11人もいて女性も3人含まれている。5000回~1000回は、ざらにあり驚くばかりである。私は10年ほど前から、登りは支障は無いが下り坂で膝が痛みはじめ、それ以降は下山にはケーブルを利用することにした。ところが1966年初めてロープウェイが開通して、50年を経ったこともあって、修理や耐震工事にかかなりの費用がかかり、村の財政や受けて立つ企業も無く、ついに昨年ロープウェイの撤去が決まった。車で登る道も無く、歩くしか方法がなくなってしまった現在、私も残念ながら体力的に、2度と登れない山になってしまった寂しさを残念に思っている。

1万回以上達成した人は11人

2018年9月時点で、1万回以上登頂した人は11人。最初に達成した人は2000年に達成しており、現在10750回を越えているとが。

登山回数記録保持者板



日本最低山（天保山）

日本で最も高い富士山は、62歳に初めて挑戦した。夜9時頃に5合目から登り始め、夜中登り続けて見事なご来光を拝した時には、生きている喜びと幸せを感じた事は忘れられない思い出である。一方、日本での最も低い山へも訪ねた。2等3角点を有する標高4.53mの山である。大阪市港区にある安治川の河口、天保山にあって登頂証明書をもたらるので、ちょっとした人気の場所である。直ぐ側に海遊館があり、天保山渡船場で無料の船に乗って、向かいの桜島に到着した所に、USJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)の施設がある。



雪山登山の家族

大阪に住み奈良県内の多い山々の中で、吉野の大峯山へ登ってないのがなんといっても心残りである。女人禁制の山上ヶ岳の崖から半身を乗り出す「覗き」の体験を一度はしたかったからである。「親に孝行するか？ 兄弟仲良くするか？ 仕事仲間と助け合って頑張るか？」と言う付き添いの修行者の間に「はい、はい、やります！」と誓う光景を聞くだけでも痛快だったからである。

私が社会人になった昭和33年(1958年)頃は、まだまだ生活は貧しいものだったからよく働

き、娯楽の類は殆ど無く休日には飯盒炊さんに出かけたり、山登りを楽しんだりする事が多かった。当時「山男の歌」という歌を、ダークダックスが唄って流行っていたものである。「♪ 娘さん よく聞けよ 山男にや惚れるなよ。山で吹かれりゃよ 若後家さんだよ。山男よく聞けよ 娘さんにや惚れるなよ。娘心はよ 山の天気だよ。」

山男は逞しくて格好いいイメージがあったし、女性も山歩きを始めた時代で、山は青春を謳歌できる対象だったものである。職場でも休日に山歩きをする人が多く、職場の中に丹波篠山に実家があり、山持ちの同僚がいてハイキングを兼ね松茸刈りに案内されて、先輩・後輩10人がすき焼きパーティをし、山の幸である松茸をたらふく食べさせてもらった。当時は松茸より肉のほうが高かったと記憶している。

職場の雰囲気は実にアットホームだったが、やがて時代は高度経済社会に入り、金持ちで男社会優先のゴルフが流行りだし、職場に格差が出始めて来た頃から人間関係はどこかよそよしくなって来たように思う。近年、アナログ時代からデジタル時代へ発展し、スキンシップ的な人間関係が希薄になってきた。

山歩きする人は今でも、山ですれ違った時にお互い挨拶をする習慣は途絶えていない事が嬉しい。今回、野口幹夫編集長兄の「富士山に登ってきました」を拝読し、この富士登山の体験談は実にリアルで臨場感があって、私も同じ経験をしただけに楽しい思い出に繋がった。何より、終始野口兄に寄

り添い、激励した高橋氏のような人物が山歩きに同行された事や、人は独りで生きて行けない事を語って頂いたエッセイに感銘したものです。スマホを相手に暮らす日々を、もっと自然との共生を楽しむ社会になって欲しいと願っている一人である。

令和5年8月 記

(追記) 高津5期HP「交遊の広場」(2006年6-228)に「雪の金剛山」と題した小生の拙稿があります。

当時 亡き安藤義信兄の奥様が生徒を連れて金剛山に登った経験から、懐かしかった読後感を頂戴した事を思い出しました。